會報

第五年第十一号

ハイキング排撃

空高くハイキング！　こゝまではいゝ。「山は拓くし嘘を吐け！」招いてゐるのは鉄道省だ。乗車賃が欲しいから。近頃困ったものが流行ってきた。ハイキングといふ山登りと散歩の混血児みたいな代物だ。丸そ、直訳的な、不消化な、浅薄な流行ほど困ったものはない。其たなるものが此ハイキングといふ奴だ。大自然を敬ひ、愛し、尊むべきことも何も知らない、手合が我も我と鉄道省の宣傳にのせられて、まるで魚の腸にたかる青蠅の様に所謂名勝地に集るのだから堪らない。しかも、猶困ったことには、新コース紹介とか云って、切角此狭い日本の中に清く気高く残って居る聖地にハイカーとか云ふ百姓共を呼びこむことだ。こんな自然に何の理解もないゝ加減な奴共の帰って行った後はさながら日暮里辺の紙屑問屋の店先よろしく、小便の壁は落書、岩にはセキトメアメ、三角櫓にはムムム山岳會等々。

役人といふ人類は実に無責任極まる人種で、結果は何時でも野となれ山となれ式だ。汽車に乗る人が一人でも餘計ならば、目的は達したのだから、その結果、自然が汚されやうと何しやうと涼しい顔をしてゐる。そして又、こんな線香花火の様な流行に集って来る奴等に碌な奴の居った例がなく、実にキザとも頓馬とも、阿呆とも例へやうのない馬鹿者共が元てして集る。松葉山でピッケルを振り廻す手合だ。僕の知人の娘が、此阿呆の一人で、デパート売出のハイキング用とやらのズボンをはかねばハイキングに行かれないといふに至っては正に々、ズボンをハイキングだ。困ったことが始まったもんだ。何とかこいつを退治する工夫はないものかな。

（七矢衛）

部室から

秋の登山も一段落っきましたから、今秋の部の動きを御報告いたします。

㊐北アルプス方面

1. 鹿島槍ヶ岳　望月達夫、鷲野雄一

一〇、三一、晴後曇　大町（九、四〇）―バス―篠場―黒澤峠―鹿島造林小舍（二、三〇）

一一、一、曇後雨　造林小舍（一一、〇〇）―大冷沢を溯る―赤岩尾根―冷池小舍（五、〇〇）

一一、二〇、曇後晴、烈風　小舍（一二、〇〇）―布引頭―鹿島鎗（二、〇〇）―小舍（三、三〇）

一一、三、晴、烈風、小舍（八、三〇）―造林小舍（一二、〇〇）

天気不調なると、望月が時日に制限がある為予定の東尾根は断念して、普通のルートを往復。鹿島川辺の秋色はあくまでも美しく、新雪の剱、立山等の眺望は絶佳だつた。鹿島鎗は新雪わづかに七、八寸から一又余。鷹野は三日到着した小谷部、森脇と造林小舍にのこり、望月独り鹿島川沿の道をブラ〳〵と大町へ下る。

2、鹿島鎗ヶ岳　小谷部全助、森脇芳之、鷹野雄一、

これは十一月四日―七日の四日間、三晩のビヴアワクを以て、天狗の鼻の尾根より鹿島鎗へ登つたものであるが、一行が三高生の遭難に関係したりして小谷部が未だ帰京して居らず未詳であるが、記憶されてい、登攀だと思ふ。詳細は改めて報告します。

3、穂高、小林重吉、遠藤竹雄、鷲崎雄四郎、奥原守（案内）

一一、三、晴後雪、松本―島々―上高地―徳澤（三、〇〇）

一一、四、快晴　徳澤（七、四〇）―横尾谷―穂高小舍（四、〇〇）

一一、五、快晴　小舍（八、〇〇）―奥穂高―前穂高―奥穂高―穂高小舍（三、三〇）

一一、六、曇　小舍（九、〇〇）―北穂高飛騨側第四尾根迄―池の平―徳沢（三、三〇）

一一、七、雨後雪　徳沢（一一、〇〇）―上高地―松本、横尾谷出合より新雪一、二寸、池の平附近は約五、六寸。

奥穂高の登りは新雪の氷化及び、岩に二、三分の氷が附着してゐるので稍注意を要したが、其他はアイゼンを利かせて楽に行けた。

北穂高では思つたより多くの雪が氷化して、アイゼンを唐沢岳との鞍部に置いて来た我々は、頂上を眼前にして退却の憂目にあつた。

◎南アルプス方面

1、甲斐駒ヶ岳、鋸岳　森川真三郎、榎本直司。

一〇、二一、晴　日野春（三、三四）―柳沢―黒戸山の尾根―刀利天―五合小舍（三、二〇）

一〇、二二、晴　五合小舎（八、三〇）ー七合小舎ー頂上（一、三〇ー四、二〇）ー六合小舎（五、二〇）

一〇、二三、曇　六合小舎（六、三〇）ー三ッ頭ー鋸岳第二高点（七、三〇）ー「ぎゃップ」（二、〇〇）ー第一高点（〇、三〇）ー横岳峠ー釜無沢ー武智鉱泉（二、五〇）

一〇、二四、曇雨　鉱泉（二、〇〇）ー富士見

鋸岳の岩場には氷がはつてゐて慎重に登つた。

五合小舎は何の設備もなく非常に寒かつた。

2、甲斐駒、仙丈、浅夜、赤薙沢

堀岡清、林俊介、高原龍雄、岩崎利一、

一一、三、晴　韮崎（二、五八）ー柳沢ー尾根（一三、〇〇）ー五合小舎ー七丈小舎（五、二五）

一一、四、晴　小舎（八、〇〇）ー駒ケ岳（一〇、三〇）ー二、〇〇）ー仙水峠（三、〇〇）ー北沢長衛小舎（四、三〇）

一一、五、晴　小舎（八、〇〇）ー小仙丈（一〇、三〇）ー仙丈（一一、三〇）ー一、三〇）ー小舎（四、〇〇）

一一、六、曇後吹雪　小舎ー仙水峠ー浅夜峯（一二、三〇）ー早川尾根小舎（三、三〇）

此の日堀岡一人北沢峠を越えて伊那へ向ふ。

一一、七、雪　小舎（六、三〇）ー賽河原峠ー赤薙沢ー大薙鉱泉（六、三〇）

吹雪の為鳳凰行を中止して赤薙沢を下る。意外に甚だしいがしと瀧に苦しみ大武川の出合で日没。赤薙沢の踏跡は殆ど消えて了つて居た。

一一、八　曇　鉱泉（二、〇〇）ー柳沢ー韮崎

◎秩父方面

1、雲取山より唐松谷、　森川真三郎

九、二二、晴　氷川ー六ツ石ー七ツ石ー雲取小舎、

九、二三、晴　小舎ー雲取山ー唐松谷を下る。ー氷川。

唐松谷は陰惨だ。倒木の多いのに苦しめられる。

2、釜沢、　金峯、信州峠、奔藤正治、林俊介

一〇、一七　雨　笠山ー黄瀬ー笛吹川二股ー麹岩小舎

一〇、一八　晴　小舎（八、四五）ー釜沢小舎（一〇、二〇）ー両門瀧ー露営（五、三〇）

一〇、一九　晴　露営地（八、三五）ーミヅシの頭（二、三〇）ー甲武信（一二、〇〇）ー東股頭ー国師岳（五、三〇）ー岩小舎（六、四五）

甲武信の樹氷と国師の雪とは思はぬ美観だつた。

一〇、二〇　晴　岩小舎（六、三〇）ー国師ー金峯山（一、三五ー二、二五）ー大日小舎ー富士見平（五、一五）ー松平牧場ー黒森（六、五〇）

富士見平で日は暮れて松平牧場を訪ねたが、既に人無く、止むなく黒森まで月光をあびて歩く。

一〇、二一　晴　黒森ー信州峠ー御所平ー小海ー

3、石塔尾根　鷹野雄一、

一〇、一九、曇時々晴、　盛山ー廣瀬ー二俣（二、〇〇）

一〇、二〇、晴　二俣（七、三〇）ー西澤七ツ釜の少し下手ー尾根へ出るー二俣へもどる（四、三〇ー六、〇〇）ー盛山（一一、五〇）

西沢を行くつもりで左岸をカランだところが降りロわからず尾根を行く。秩父の紅葉は美しい。

廿日の夜は二俣へ泊る積りが折りからの月明に誘はれて思はず盛山まで歩いてしまった。

4、雲取山　柿原謙一

一〇、二〇、晴後曇　氷川（九、〇〇）ー鴨沢ー七ツ石小舎（四、四〇）

一〇、二一、晴　小舎（五、四五）ー雲取山（七、三五）ー白岩山ー三峰神社（二、二〇）ー上野

廿一日黎明に見た富士と紅葉と白樺の対照は美しかった。

5、金峯山　原鉄三郎　岩崎利一

一〇、二一　晴　甲府ー昇仙峡ー猫坂峠ー黒平ー炭焼小舎（三、三〇）

一〇、二二　晴　小舎（七、三〇）ー御室（九、〇〇）ー金峯山（二、〇〇ー二、四五）ー大日小舎ー盆山（九、三〇）ー増富（一二、一〇）

一〇、二三　曇　増富ー帰京

◎東京附近

1　棒ノ嶺より川乗山、　岩崎利一

九、二四　晴後曇　軍畑（七、〇〇）ー高水山ー棒ノ嶺（一二、二〇ー一、〇〇）ー獅子口ー川乗山（四、三〇）ー棚沢

2、高尾山　小谷部金助、森脇芳又

一〇、一三　快晴　浅川（一一、〇〇）ー高尾山ー小佛城跡ー日影沢小舎ー浅川

3、高尾山　堀岡清

一〇、二八　晴　高尾山ー小佛峠ー景信山ー興瀬

◎上越国境、北海道等　柿原謙一

1　三国峠

一一、三　晴後曇　後閑ー法師ー三国峠ー法師

一一、四　晴　法師ー赤沢林道ー四万

赤沢山の紅葉よく上越の山が美しく見えた。

2　大雪山、　増山清太郎（先輩）、堀岡清

九、二〇　小雨　層雲峡ー黒岳石室

九、二一　雪　滞在

九、二二　曇　層雲峡へ下る。

（一九三四、二、一八　記録委員　望月　記）

East bourne → Bottlea, Oct. 10.

そろそろ住み慣れた様に思へるイーストボンの

町と、そこに住む人々に別れる事は流石に多少の淋しさを感じさせられた。大して永い滞在でもなかったのに、此の町の印象は相當に好ましいものであった。drizzle の中をセントジョンズホテルへ行って car をガレージから引出した。ペトロールを入れに行くとスタートの調子が悪い。行きつけのガレージで見て貰ふとバッテリーが lose な為だった。荷物は簡單なものでカーに納ってしまふ。雨は相変らず降って居る。Uppertown Road の混雑した traffic は雨の為に特に厄介だったが、そこを過ぎて Beachy Head の坂をセカンドギヤでブラ〳〵上る頃には脆の調子もソロ〳〵、慣れて来た。ひどい突風が海から吹き附けて来るので不愉快である。イーストデイーンの坂からブライトン辺までは何の事はなくヒタ走りに走った。一度道を失ったが直ぐとメインストリートに戻る。ブライトンでも四角でキューピレットの信号を見違へて反対側に乗り入れたが大した罰も當らずドシ〳〵両の中をとばす。アルンデルへ行く途中の森はこれで二度目だが素晴らしい森だ。アルンデルの手前で一應ストップして地図を見た迄はよかったが、町の中で Road up して居って狭い橋を渡る時に二十哩のスピードをつけてをいた所が、橋の傾斜のすぐ下で急に左へ曲った上に又ずく右に曲る。この時向ふ側からカーでも来てゐたならば完全にやられてゐたぐらう。全く命拾ひをした。これがいゝ経験になって後にはスローダウンする所は注意してやったので二度と斯んな事はなくて済んだ。十一時半頃チチエスターに着く。町の真中でつひ左手の大きい道に出てしまったのが間違なら、その内にサインポストで分るだらうと考へそのまま進ばして行ったのが悪かった。余り人通りが少いので Side の所で車を停め通りかゝりの女に聞くとチチエスター近迄ならねば駄目だといふ。其処は丁度入江になって居て、方向はいゝんだが渡し場でカーは渡れぬといふ訳。仕方なしに後戻りしてチチエスターで晝にする。丁度 Cathedral の前に車を停めてレストランを探して引返すと、please don't park in front of this house と書いてある。イヤハヤ散々だ。レストランへ戻ってカーをパークして飯にする。それから切角だからと思って Cathedral に一瞥を與へる。大した事なし。それからカーを引出さうとするとデカイ奴が何時の間にか前へ狭って居てカーを出さうにも出されず閉口して少しづゝゴト〳〵動かして努力してゐる内に遂に後のカーにタッチしてしまっ

た。シマッタと思ったがホンのタッチで何のdamageもない。すると彼のカーの持主が出て来て動かして呉れる。サンキユーを心から言って又ドライヴオンする。痛快な直線道路を四〇〜四五哩でグンぐ走らせると間もなくポーツマスへの分れ道に来る。実はポーツマスは寄らぬつもりだったんだが時間も早いしカーの調子も乞ならEnter近はワケなく行けさうに思へるので寄る事にする。繁而街の混雑の中へカーを入れると又モロ紧だ。いゝ加減地図で見當つけて置いた方向へ進んで行って車掌みたいな奴に道をきく。H.M.S. Victoriaへ行く路を教えてくれと言ふと、それはドックに居るのか砲術学校に居るのかと変な事を言ふ。His Majesty's ship "the Victoria"と丁寧に言直して見ても仲々分らない。到頭最後にNelson's ship "The victory"の間違でヴイクトリアとヴイクリーとを混同して居たのだった。それにしても英国人って奴の勘の悪い事は此の三分間の會話で分る。漸くドックヤードへ行く路を教ってノコノコ行く。お巡りが居るので観てもいゝかと念を押すと親切にカーのパーク場所を教へ中に入ってコンステーブルに案内して貰へといふ。言は礼通りに入って行って門の左の休憩室見たいな所へ行くとフオーレインヴイジターズと言ふ名簿へサインさせる。独りでノコ〳〵ヴイクトリーを目がけて歩き出したら後から平服の男がついて来てカメラを持って居ぬだらうと言ふので、ポリスマンに聞いてカーの中へ置いて来たと答へる。それでも勝手に歩かせる訳にいかぬと言ってワザ〳〵ヴイクトリーの桟橋近ついて来た。日本の事をやけに褒める。ソウダソウダと答へて置く。チップを貰ひつけてゐるに相違ない。御苦労な事だ。横須賀の三笠とは違って大きく。一緒に案内して呉れと士官に言ってから帰って行くも小さいシウス汚い木造船だが兎に角コンクリートの上に坐って居るのでは水の上に浮んで居るのである。食持はちがったもんだ。恐らしいスコッチアクセントのセイラーが村いて廻る。三笠のそれと大体に於て同様であるが當時の戦争は何と言っても日本海々戦のそれと較べてルーズであった事が分る。それだけ血の流れ方が船の損れ方が穏かでロマンチックだ。ネルソンのキャビンや傷いた所や死んだ場所等が印象に残って居る。

（以下次号へ）